国際貢献都市

岡山より愛をこめて「カンボジア・エイド」

地雷禍の子救おう

愛のエンゼル 有森裕子さん

地雷被害に悩むカンボジア。その被災者への支援や難民の救済、そして医療の充実をめざそう―と講演会が29日、岡山市内で開かれる。岡山っ子の優しさといたわりの心で、人道援助のかけ橋を、名づけて国際貢献都市岡山より愛をこめて「カンボジア・エイド」。アトランタ五輪の銅メダリスト、有森裕子選手(リクルート)が特別講演する。

29日、ふるさとで熱いハートの特別講演会

心優しいヒロイン

アンコールワットHM 子らを励まして走る

いま、一番輝いている女性といえば、有森選手だろう。一流ランナーとして、国際的な社会貢献へのボランティアとして2つの顔を持ち合わせている。

ランナーの顔は、よくご存知だろう。92年のバルセロナ五輪で銀メダル、昨年のアトランタ五輪では、猛暑のなか銅メダルを獲得、華々しい活躍で国民を熱狂させた。

彼女のもうひとつのよさは"優しさ"。ボランティアに生きがいを見いだしていることだろう。昨年12月、カンボジアで行われたアンコールワット国際ハーフマラソン。テーマは、「対人地雷で手足を失った犠牲者・子供たちに愛の義足を!」だった。カンボジアには人口とほぼ同じ1000万個もの地雷が残っているといわれている。

「招待されてうれしかった。迷うことなく現地へ出向きました。カンボジアの人達の置かれた状況について、根底の部分で理解して参加すべきだと思いましたけれど、まず参加することに意義があるのではと思いました。自分で見て、肌で感じて2回目に参加する自分がもっと大事じゃないのかなぁと思って」

カンボジアでは、平和への祈りを込め、愛のランとなった。現地の子供達との心の触れ合いもあった。体調を崩し、ファミリー4㌔に出場したが、何度も折り返し点を往復、子供達に声をかけながら走った。

「ネバー・ギブアップ」「ノン・ストップ」走る喜びを力に…。彼女は汗をにじませながら言った。

「これまで、こういう言い方をしたことはないのですけれど、今回は走ることが得意でよかったと思います」

多くの子供達に笑顔を送れた。かえってくる子供達の目がきれいだ。地雷などで足を失った子供達も一生懸命に生きている。かわいそうという言葉はあてはまらない。むしろ、"強さ"を感じとった。

これからもこの感激を、この時間を大切にして走り続けたい。レース後、彼女は地雷被災者のため50万円を寄付している。

29日から故郷の岡山市で開かれる「カンボジア・エイド」。留学中の米国から帰国したばかりだが、真っ先にお手伝いに名乗りをあげた。自分の体験を1人でも多くの人に…。1人1人の力が大事なことを痛切に感じている。

岡山からカンボジアへの"愛の発信"。テーマは決まった。「地雷禍の国、カンボジアを走って」

熱いハートに包まれた彼女は、カンボジア救済へと立ち上がった。

◇略歴◇〈有森裕子〉昭和41年12月17日生まれ。岡山県出身、30歳。身長166㌢、体重49㌔。岡山北中時代はバスケットボール部所属。陸上は岡山・就実高へ進学してから始める。日体大1年の時、関東インカレ3000㍍、2位。4年の大学女子駅伝では区間賞を獲得。平成元年、リクルート入社。初マラソンは平成2年の大阪国際女子で、2時間32分51秒(6位)。自己最高は同大会で翌年記録した2時間28分01秒。オリンピックは92年のバルセロナが銀、96年アトランタが銅メダル。44回菊池寛賞受賞。語学研修のため米国へ留学中。現在、一時帰国している。

(上)ファミリー4㌔で、子供達と一緒に走る有森裕子選手=昨年12月のアンコールワット国際ハーフマラソンから (下)プノンペン市内では地雷で足を失した子供を励ました=カンボジア・トラスト(義足工場)で

AMDA 被災地の医療救済に幅広い活動

カンボジアには内戦や地雷で傷ついた子どもたちが救済の手を待っている。診察に治療にAMDA医療班は懸命

岡山の灯いま世界へ

いつ手、足を飛ばされるかわからない対人地雷の恐怖。長い内戦のあとにきたウツの嵐と発狂の不安…。いま、「カンボジアを救え」の声が、急速に全国に高まっている。

この医療救済の中心と、期待されているのが、AMDA(アジア医師連絡協議会)だ。一般に、アムダと発表されるが、次の正式名の略称である。

THE ASSOCIATION OF MEDICAL DOCTORS OF ASIA

アジアで国連で厚い信頼

菅波茂 AMDA代表

国内に1500人、海外に300人の会員を持ち、各国の医師の数だけで300人を超えるとか。これにいろいろな国の看護婦や医学生、市民ボランティアが燃える思いで協力し、フットワーク抜群の国際医療集団を結成している。

東京オフィスのほか、世界15カ所に支部を置いて医療救済を毎日のように続けているが、その本部は国際貢献都市・岡山市にある。

1984年、この町から1人の医師と、2人の医学生がカンボジアに飛んだ。

「難民を自分達の手で救いたい」

しかし、自分達の力と経験だけではほとんど何もできないことを痛感。この絶望感から立ち直り、創設したのがAMDAだった。当時のリーダーとなった医師が、今日の代表・菅波茂氏(50)である。

その活動は幅広く、海外では戦火をくぐって難民を助け、自然災害の被災地で不眠不休の医療活動を行っている。同時に、医学の恩恵を知らない人達のために巡回医療や、保健衛生の指導、教育にも当たっている。

国内でも「72時間ネットワーク」推進

一方、国内でも阪神・淡路大震災の救援活動など民間団体と組んで3日間以内に緊急活動を行う「72時間ネットワーク」を推進しているし、在日外国人のために無料の医療相談なども行っている。

NGO(非政府組織)は無数にあるが、その中でもAMDAの活動は出色だし、国連やアジア各国の信頼も格別に大きい。

この愛の集団が、今回、アトランタ五輪の花・有森選手をむかえ、地元岡山で全力キャンペーンしているのが「カンボジア・エイド」である。

多くの対人地雷被害者への心身のケア。内戦の後遺症であるウツの治療。創設の原点となったカンボジアが、いまも泣いている。国際貢献都市岡山の誇り、AMDAと有森選手がしっかりと差し伸べる愛の手は、多くの成果を挙げることだろう。

地雷とウツの二重苦 内戦に泣くカンボジア

タイとベトナムにはさまれた仏教王国。首都プノンペン。人口900万人で95%が仏教徒。シアヌーク国王の下で連立政権をつくっている。

国としての最盛期は9世紀から15世紀。クメール帝国時代でミャンマー、ラオスを支配した。また、都城に世界遺産の仏教寺院遺跡アンコールワットを建造。武力だけでなく、文化、芸術、科学でも東南アジアで卓越していた。

しかし、以後はタイやベトナムの侵略に苦しみ、1863年にはフランスの保護国に転落した。ようやく第二次大戦後の1953年にカンボジア王国として独立したが、すぐベトナム戦争に巻き込まれ、内戦続き。

とくに1975年から4年間、左派のポル・ポト派が政権を握ったときは、知識人、熟練技術者、芸術家から乳幼児まで100万人を虐殺した。また、飢餓や病気で亡くなった人も200万人といわれる。

1979年にベトナム軍がポル・ポト恐怖政権を打倒したが、再び内戦状態へ。やっと1993年に国連軍の力で現在の平和が訪れた。30年の内戦時代にばらまかれた対人地雷は1000万個。国民1人に1・1個となる。また対人地雷による手や足の切断者は4万人で、国民230人強に1人の割合。いずれも、世界最悪の数字だ。

また、戦火がおさまると逆に吹き出してきたのが、精神病。AMDAは、"ウツの嵐"と呼び、治療薬の不足を訴えている。

主催 AMDA(アジア医師連絡協議会) JR西日本岡山支社
後援 産経新聞 サンケイスポーツ OHK アンコールワット国際ハーフマラソン事務局
特別協賛 大塚製薬
協賛 浅野産業 住友生命保険岡山支社 ソニー生命保険 蜂谷工業 OSKスポーツクラブ岡山スポーツ会館 ぼくでん デンショク 協同精版印刷 イルカ ユーディーケイ アーネットクリエーション 千々木岡山店 瀬戸内改革振興会 創プロデュース アートスタンプ 三好野本店 友野印刷
協力 日本赤十字社 ラパラ
企画 JR西日本コミュニケーションズ岡山支店

PM 1:30 岡山市伊福町「ノートルダム清心女子大」で

「人道援助の世界都市」 AMDAの菅波代表が基調講演

パネルも展示

講演会は29日午後1時半から、岡山市伊福町のノートルダム清心女子大で行われる。産経新聞、サンケイスポーツなどの後援で有森選手の特別講演とセミナー(入場整理券が必要)、パネル展示、ビデオ上映(入場無料)などがある。

基調講演はAMDA代表の菅波茂氏で、テーマは「人道援助の世界都市」。特別講演の有森選手は、昨年12月にカンボジアで行われたアンコールワット国際ハーフマラソンの体験談を中心に、カンボジアの救済を訴える。

会場内には、パネル展示のほかアンコールワット国際ハーフマラソンのビデオが上映される。講演は、29日のみ。パネル展示は31日から4月5日まで同大学で。4月6日から13日までは、JR岡山駅構内で展示される。

会場ガイド

《会場》岡山市伊福町2丁目、ノートルダム清心女子大カリタスホール。

《あし》JR岡山駅西口下車、徒歩10分。目標は、済生会病院。

《問い合わせ》AMDA本部事務局☎086・284・7730。ノートルダム清心女子大☎086・252・1155。

パネル展
29日〜4月5日 清心女大
4月6日〜13日 JR岡山駅